

書 評

ビジュアルコア生物学 ▶ E. J. Simon 著／八杉貞雄 監訳／石井泰雄, 澤進一郎, 副島顕子, 松田 学 訳

ビジュアルコア生物学／E. J. Simon 著／八杉貞雄 監訳／石井泰雄, 澤進一郎, 副島顕子, 松田 学 訳／東京化学同人 2019／B5判変型 208ページ 2,600円+税
非常にコンパクトにまとめられた初心者向けの基礎生物学の教科書である。全12章からなり、各章は平均して7～8項目を含んでいる。そしてそれぞれの項目が見開き2ページまでで完結しているので、本文は180ページに収まっている。

扱っている内容は、基礎生物学の教科書としてバランスがとれており、細胞、代謝、遺伝子はもちろん、進化、生物多様性（微生物、菌類と植物、動物）、生態学、さらに人体の構造と機能という章も含まれている。解説はあくまで基本的な部分だけであまり深入りをしないというスタンスである。原著者の前書きにある、「身につけるべき最も重要な内容、つまり学生が10年後もまだ記憶してほしい情報に焦点を絞った。」ということばがこの教科書の特徴を如実に表している。ただし、項目によって記述の詳しさには差がある。例を挙げるとDNA複製のしくみは極めて簡単にしか書かれていないが、これと関連する、細胞分裂・減数分裂、有性生殖と遺伝的多様性などはある程度詳しく書かれている。これには生物学的な意味の重要性を理解させたいという意図が現れているのかもしれない。

目を引くのは、ページの大部分をカラフルな図や写真が占めており文章の量が少ないことである。しかし、そこには工夫がある。一つの解説文は一つの段落だけからなり、それぞれの文に対応して一つの図が付けられている。したがって読者は文と図を一組にして理解を進められるしくみになっている。また、各項目の冒頭には、その項目で何を学ぶのがよく分かるイントロダクションがあり、最後には「コアアイデア」としてその項目で核となる知識や概念がまとめられている。全体に日本語訳はこなれていて読みやすく、文章量が多くないので、どんな学生でも文字通り全体を「通読」可能であろう。これは大事な点だと思う。

ビジュアルと謳っているように視覚に訴える教科書であり、美しい図が豊富に採用されて理解を助けている。ただし図や写真のサイズが必要以上に大きいと感じる部分があるが、インパクトを与えるという意味で現代の学生の気質には合っているのだろう。

この日本語版は、日本の大学での授業時間などを考慮して原著の内容を取捨選択してさらにコンパクトにしたと訳者の前書きに記されている。原著と比較すると、図のレイアウトも再構成されており、かなりの労力がかかっていると想像される。そのおかげで限られた講義時間での学習のために、より使いやすくなっていることは間違いない。ただし、図が小さすぎて見にくいものもあり、このあたりはコンパクトにすることによって犠牲になった部分と感ぜられ残念である。

教える側から考えると、生物学に馴染みのない学生には、この教科書に準拠して説明を加えていくことで最低限の基礎を教えることができるし、項目によって少し詳しく説明したければ、教員が内容を付け加えて講義するというような、自由度の高い使い方ができるだろう。大部な教科書であると、どこかを省略して講義することになるが、この教科書は省略の必要がなく、必要なら追加していけばよい。このようなやり方は、初心者にとっては基礎（コア）と発展的内容が区別できるので学習を容易にするのではないかと考える。

結論として、生物学を専門とせず、特に高校で生物を十分履修してこなかった学生の初年次での講義に使用する教科書として推薦できる。また、医学、薬学あるいはメディカル系のような専門学部の初年次教育においても、生物受験でない学生のためのリメディアル教育の一環として限られた時間での講義に使用するにも適していると思う。価格も手ごろである。

(中村和生 北里大学一般教育部
自然科学教育センター生物学)